

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気づきから使われはじめた言葉です。

### 甲賀100歳大学二期生 まもなく卒業

# 人生は2幕目がおもしろい 高齢者ではなく幸齢者でありたい

## 受講生感想文より

100歳大学に参加し、毎週金曜に受講できることを楽しみにしていました。1年間の講義で感じたことを活かして健康で楽しく張り合いのある毎を送ろうと思います。

日進月歩のこの世の中で、邪魔にならぬよう、取り残されぬよう、努力しなければと思うようになりました。

これまであまり興味を持っていなかった講座を読み返すと、「読み考えること」の大切さを感じます。「多聴」「多読」「多笑」「多喋」が日頃の目標です。

今回学んだことを眠らせず、卒業後も、同期の仲間と楽しめて、地域に結びつく行動をしていければと思います。

私たち高齢者が若者から羨ましがられて「甲賀市ってやっぱりいいな」と思ってもらえる1ピースでありたいです。



ノルディックウォーキング



リアル忍者館見学



自分の身体を考えよう



コミュニティ・コーピング体験会



回想法をやってみよう



安全な身体づくり・体力測定



「オール甲賀でまちづくり」岩永市長と記念撮影

甲賀市では、令和4年（2022）度より、高齢者の健康と生きがいづくりのために、「甲賀100歳大学」を開講しています。今月3月22日に、令和5年度の二期生30名が、全40回の講座を終了され、卒業を迎えられます。「人生100年時代は覚悟と備えが大切」との國松善次理事長（一般社団法人健康・福祉総研）のご指導を受けながら、時代に合った自身の心身の健康づくりとまちづくりを学ばれました。令和4年度の一期生に続き、二期生の地域デビューが始まります。やる気に満ちたみなさんの活躍が期待されます。

國松理事長



## 甲賀市の取り組みを絶賛



すこやか支援課・自殺対策事業

## 俺、なんか分かった!

こころの居場所づくり R6.3.2

雪交じりの空になった3月2日（土）、日本列島の寒波を吹き飛ばす「こころの居場所」がまるこで開催されました。このイベントは広報大使の世津田スズさんとコラボし、市の自殺予防対策事業として開催しました。若者世代に響くアーティストの作品やライブトークから「こういう生き方アリなんだ!」と気づきを得る契機になったのではないかと思います。世津田さんとアーティストたちとの対話は、動画配信とともに、会場には多くのファンの



①



③



②

- ①ライブ配信中
- ②アーティストとの対話
- ③アーティストたちの作品



イベントチラシ

方が詰めかけ、外の寒さを吹き飛ばすほど、熱気に満ちていました。社会的にも問題になっている若者や子どもが一人で抱え込むことなく、多様な学びから自己肯定感や自己有用感を高めて、安心できるこころの居場所として定着することを願います。

### 問われる行政

## 孤立する高齢者への対応

### 身寄りのない人への支援会議

甲賀市においても、血縁、地縁など人間関係が希薄で、親族がいない、または親族がいても疎遠で援助を得られない孤立した状態で、高齢期や終末期を迎える人が増えています。今年度は、「身寄りなし問題」について、事象が発生した時は、地域共生社会推進課が中心となり、庁内の関係者と支援会議を行い、死後処理業務や相続人の探索等を行いました。また、事例を元にし

たケアマネジャーへの研修会、甲賀市でのルールづくり「カイドライン作成の取り組み」がスタートしました。今後は、病院と連携した医療同意や身元引受など法的な問題も考慮しながら、その人の権利を護ります。支援者や関係機関の不安や負担を軽減するためには、庁内、庁外との協働、そして予防的支援が必要となってきます。



甲賀・甲南ケアマネジャー研修会  
2023.10.11



庁内・身よりなし検討会議  
2024.3.12

# 懐かしい未来新聞

発行：甲賀市  
地域共生社会推進課  
連絡先 内線1356  
0748-69-2155

本号の紙面  
★甲賀100歳大学二期生卒業  
★こころの居場所づくり  
★身寄りのない人への支援会議  
★重層物語 ファイナルシーズン

## うまくいき過ぎた重層物語 FENWAL-2

2月号に続き、『薄い月明かり』と題して重層物語をお届けします。地域共生社会を理解する助けになれば幸いです。

## 【前回のあらすじ】

地域市民センターの窓口で出会った二人の、「のぞむ」。  
住み込みの職を求めて甲賀市にやってきた間島は、なにやら生きづらさを抱えている。そんな間島を他人事として片付けられない河本は、次に間島がやってきた時に、こちらから手を伸ばしたいと考えていた。  
過去をほじくり返しても、ひとりよがりな救世主願望が出るばかりで悶々と時間は過ぎていく。ただ、おぼろげながら直感めいたものはあった。  
“ひとりでは新しい景色は見えない” 間島にとって、そして、河本にとって “新しい景色” とはなにか。

一週間が過ぎて、間島はやってこなかった。  
ここ数日の河本の関心事は、間島から突き放された時に感じた奇立ちのことだった。思考は過去を遡り、地下に潜り、暗いところを探ります。原因が判明したのではないが、確かに言えることがあった。それは、間島の生きづらさが自分の中に存在していることだ。

お得意の性分は、その射程をひろげた。間島ひとりが苦しいのではない。誰にも声を届けられない人間は他にもいる。言わない彼もいれば、言えない男もいて、生きづらさの自覚すらおぼつかないアイツがいる。

一週間が過ぎて、間島のことを考える時間は減っていった。同じ名前とはいえ、一度会っただけで、当然のことかもしれない。今日も社会はめまぐるしく動く、忙しい世の中では、いかに効率的に生きるかが肝要とされる。便利なツールを駆使して時間をつくり、空いた時間に次の予定を埋める。暇は不必要なものとされ、余計なことは考えなくていい。

マフラーの爆音が聞こえたのは、皮肉めいた感慨に浸っていた午後四時過ぎだった。ほどなく、黒いダウン姿の間島がセンターに入ってくるのが見えた。河本は自席を離れ、約束していた相手が来たかのように軽く手をあげた。目が合った間島は一度立ち止まり訝し気な表情をつかべながら、小さく手をあげた。

窓口のカウンター席に向かい合わせで座る。マスク越しにもタバコやらの鬱積した臭いがする。二週間分のびた髪はポマードを付けたようにべたついていた。気にならず振り、今日は、自立支援医療の手続きですね」と、河本は言った。気にならず振り、今日は、自立支援医療の手続きですね」と、河本は言った。気にならず振り、今日は、自立支援医療の手続きですね」と、河本は言った。

「違います。今日は転出届を出しました」  
「どうして」と、間島は言った。  
「立ち入ったことを聞くべきではなかったが、実にあつさり間島は答えた。  
「今より条件の良い仕事が見つかったので、そっちに行くだけです」  
台詞みたいに慣れた調子だった。

転出届の用紙を差し出すと、間島はペンを持って、例のごとく身体を小さく丸めて書きはじめた。『望』という字を、一画、また一画と書く、下手ではないが整ってはいえない。頭をついたフケが空調の風で揺れている。ほんやりとそれを見ながら、微かに届く筆跡の音を聞いている。

「こいつは何をやっているんだ、ひどく冷笑的な気分になった。  
用紙の記入に時間をかける意味はあるのか、一カ月も経たぬうちに仕事を辞めるのか、無断欠勤でもやらかしたんだろ、仕事を辞めてもお前は変わらない、役にも立たない……」

あの男も間島と同じ年くらいだった。  
学生の頃、単発のバイトを求めて交通誘導員をした時期があった。その警備会社の職員が派遣も分からない男。のびた坊主頭で眼鏡をかけていた。肩が太く、痩せた首すじには剃り残しが目立っていた。

男は現場が変わる度に、きまって遅刻をした。現場監督に怒鳴られては、頭の後ろを掻きながら、ひきつった笑顔で謝っていた。

交通誘導員は自宅から直接現場に向かい、帰りがけに事務所に着る仕組みだった。立ちっぱなしの仕事が終わる事務所に着くと、更衣室の入口に置かれた学校机の前で男が立膝になり、なにか書いている。近づいて見ると、次の現場の住所や付近の目

印をノートに写していた。通り過ぎようとした河本のつま先が、傍らにあった男の力パンに当たった。横倒しになった力パンから、何枚もの地図が床をすべり扇形にひろがる。赤鉛筆で道がなぞられた地図だった。

次の現場でも男は遅刻をした。普段よりもきつくしほられ、笑っているとも泣いているともいえない顔をしていた。ついには、吐き捨てるように「なんの役にも立たない」と言われた。頭を垂れたままの鼻先から大粒の汗がおちた。

いつも河本は、仕事が始まる前に到着して、道具の積み下ろしを手伝い信頼を得ていた。現場監督が「アイツとはえらい違いだ」と言いつつ肩をぽんと叩いた。

河本は、「それくらい当たり前です」と言った。  
また一滴、鼻先からほとりと落ちて、アスファルトにシミをつくる。三月にしては寒い日だった。

うつむいたままの間島を見ながら、今もあそこシミが残っている気がした。きつと、間島も、そついった言葉を耳にしたことがあるのだろう。だから、彼は今、ここですることしかできないんだ。

手をのほし、伝えたいことがあるのに、沈黙はつづく。ふと、頭の中で「自己責任だ」と声がした。誰の声……「努力を怠ったアイツが悪い」そうか、競争が大好きな社会の声だ。

「いつ、いつまで、こつちにいるん、ですか」

間島が席を離れようとした時、呼び止めるように訊いた。

「三月中に引越します。どうしてですか」  
ダウンのジッパーを首元まであげながら、間島は言った。

「えつと、行事の案内になるんですが……」

河本はでつち上げた。カウンターの置いてある広報紙を手に取り、イベント情報のページを開いて、三月後半の日付けのものを適当に指さした。

夜空旅人（天体観望会）。

「僕も行く予定なんで、よかつたら来てください」

「ありがとうございます。一応もつて帰ります」

そう言いつつ、広報紙を力パンにしまい込みながら帰っていった。

「さつきの人、風呂入ってないですよ、絶対」

間島を入れ替わりで窓口に来た男がぼそつと言った。この男も二十代後半くらいか。緩いパーマに丸眼鏡、ハイネックニットにジャケット姿が似合っている。しばらく前から、待ち合いに座り順番を待っていた。急いでいるらしく、もたつく手続きに苛立ちながら、時折、鼻をつまむ仕草をしていた。

「控除とかいいんで、領収書も要りません」

そう言いつつ、「義援金」と書かれた封筒を差し出した。

河本が礼を言おうとした時、男の携帯が鳴った。「じゃ、よろしくお願ひします」と、軽く会釈してから電話に出て、そのまま行ってしまう。

外からマフラーの爆音が響いた。

「うるせ」

出口あたりで、携帯を耳から離し、男が言った。

天体観測の日は、昼過ぎから雨が降ってきた。

（作・中井 浩喜）